

概要報告

実施期日	8月2日(水)
部会名	小学校 生活部会

神奈川県研究主題 『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』

テーマ 『自分と友達とのつながりを大切にしながら遊びを創り出し、毎日の生活を

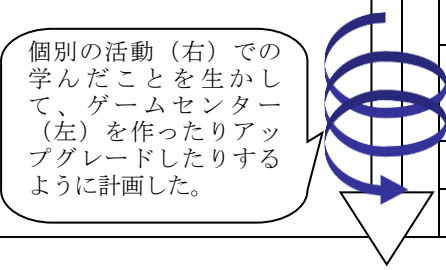
豊かにしていく授業づくり』

提案概要

① 授業と子どもたち

提案者は、児童が生活科の学習に対して受け身の姿勢をもち、「実感のある学び」が成立しないことで、児童同士のつながりが見出せないことを課題とした。また、単元と単元、単元と他教科のつながりが薄く、学んだことを活用する場面が少ないことも課題であった。そこで、児童が主体的に学ぶ姿を目指し、「①2種類の単元を相互に関連させる構成」「②『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』を活用した評価計画（認め・励ます手段）」を計画した。児童は、実際に「もの・こと」に触れる「手にとる活動」をする中で、家庭生活や幼児期の経験から醸成された、個別の見方や考え方をもとに思考し、つぶやきとして表現した。提案者は、そのつぶやきを認めたり掘り下げたりする過程で、児童同士の思考の共有を図った。その際に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識することで、児童の小さな変容に気付き、つぶやきを価値付けることができた。

② 単元構成

① 身近な自然を探検する活動・生活科って何をする時間？という問いかけ	
② 身近な自然や物を使って ゲームセンターを開こう	
③ 砂と土のちがいをを見つける活動	
④ 葉っぱがどうなっているか観察する活動	
⑤ 水がどこへいくのか考える活動	
⑥ 春を探す活動	
⑦ サクラソウの観察	
⑧ ゲームセンターを開こう2	

③ 振り返り

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識することで、教師が想定していなかった児童の姿、成長を見取るための規準とすることができた。また、児童の姿をもとに教師自身がリフレクションを行い、活動の在り方や評価計画を微調整することで、子どもの小さな気付きやつぶやきが、どのように学びに繋がったのかを知ることができた。もの・ことに直接的に触れる機会や時間（手にとる活動）を意図的に設定することで、児童の「気付きの質」が向上され、多発的な発話・探索的対話が起りやすい授業デザインとなった。それによって、児童の活動が主体的になり、伝え合い学び合う姿が見られるようになった。児童同士の関わりは、「椿の花をとりたい（自己中心性）」「花にも命があるよ（道徳的な上位概念）」と低学齢期の心の成長に即した様子が見られた。低学年の児童が自分の気付きを言語化する際には、「書き言葉（内言の表現）」だけでなく、「つぶやき言葉（外言）」に焦点を当てることで、児童の実態に即した学びの姿が実現されたように思う。

質疑応答

（ゲームセンターという授業の設定はどのように子どもたちと設定されたのか。）

「生活とは何か」を話し合った時に、実生活と教科がなかなか結び付かなかった。その過程で、一人の児童が提案したゲームセンターというアイデアがきっかけとなり、児童らの中で授業の見通しがもてた。子どもが実生活から既にもっているイメージを利用した授業デザインが必要だと思った。

（一年生でどうして”概念”の話から授業をスタートしたのか）

「たくさんの活動はしたけど、どのように学びが起こったのだろうか。」生活科という授業の評価に

関して、担任が生活科への疑問をもっていた。受け身になり易い児童実態を課題意識としてもっていたので、児童が既にもっている「実生活」のイメージを掘り出すことから授業づくりをスタートできないかと考えた。

(気付きの質の向上と、学びへのつながりはどのようにしていたのか)

(一つひとつの活動が単発であったのか、どのような繋がりがあったのか)

単発の活動が総合的に繋がりを生むような単元構成だったと振り返る。児童の資質能力を一つ一つ分断せず、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基軸とすることで、学びの機微を教師が広い視野をもって見取ることができた。

(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をどうとらえたのか、児童の実態も含めて教えてほしい)

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識することで、実際に教師の見取りの材料となり、教師側の「質の高いリフレクション」につながった。

協議の柱及び協議概要

(生活科でどのような活動をしているか)

- 1、校内にある資源を生かす。ダンゴムシは、どの学校にもいる貴重な材である。ビオトープがある学校では、地域の協力によって保全していることもあり、「ひと」の材を見出すことが出来る。
- 2、歩いて行ける距離の資源を最大限に掘り起こす。農業高校が近いと色々な体験を連携して組める。地域によって自然との関わりに格差があるので、教師がどう捉え、進めていくか。格差が少ないものだと、近隣の公園は活用しやすい。公園に通年で行くことで変化に気付ける。生活科マップを学校ごとに作成するなど、どの教師も取り組みやすい工夫をしている学校もある。近隣の畑を借りる時には、必ず「ひと」と関わりが生まれるので良い。
- 3、ビーチクリーンなど、活動が目的化してしまうと、何を学ばせるのか単元計画を実行することが難しい。教材の少なさから、教材プランターに頼らざるをえない状況がある。季節の学習で、梅雨の良さを発見したように、マイナスをプラスに変えるのも授業の計画による。
- 4、きっかけを与えるのは教師で、活動を創造するのは子ども。それを価値付けていく。単年で終わらない体験と発見は、地域性と地域の協力から得られる。

(子どもの気付きやつぶやきをどのように共有しているか)

観察カード、ロイロノート（写真共有は、児童同士が共同注視の状態となる良い手段）、思考ツール、語り合い→板書、壁面（日常的に振り返ったり共有されたりする。）

○ 教師の質問力が大切。問いかけで方向性や興味関心が変わる。何を焦点化して話すのかは課題。また、子どもたちが自分で選べる共有方法をどれだけもっているのかが大切。低学年の児童は、文字化や言語化の難しさがあり、個人差もある。絵を描いてもうまさが全く違う。参加しやすさを大切にして、個々の活動をしっかり確保してあげたい。「〇〇グループ」と名札に書いたり、それぞれのプロジェクトがやっている内容を見合ったりできるようにする。言語化が難しいからこそ、グループやペアの学びがとても大切。

まとめ概要

生活科という教科を通して、子どもたちにどのような力を付けさせたいのかを明確にして計画することは大切である。それは、一人で計画するのではなく、同僚性を大切にして、地域と共につくりあげる必要がある。また、授業を同僚に開き、振り返ることで、授業者だけでなく関わる教員同士で学び合える。低学年教育の中で重要な生活科の専門性は、子どもの姿を追う教科だということである。生活科は、5つのキーワードにまとめられる。「①自分自身の気付き「僕、私」が主語になる学び」「②スタートカリキュラムなどによる円滑化、遊びを通した総合的な学びと系統的な学びのドッキング」「③対象に直接接触れ、表現する学び」「④評価は、子どもの姿に注目し励ましそっと背中を押す、どの姿に学びがあるのか見とる」「⑤無自覚なものを自覚させる」思いや願いを叶えていく展開をつくれる教科である生活科は、児童が教師の予想を超える姿が見られる。